



令和7年6月12日

報道関係者各位

国立大学法人北海道国立大学機構
帯広畜産大学

**パンデミック期の博物館のデジタル変革の舞台裏を質的調査
～欧州リトアニアを事例にインタビュー調査～**

【リリース概要】

帯広畜産大学人間科学研究部門の木村文准教授は、COVID-19 パンデミック期における博物館のデジタル変革について、その基盤となる「舞台裏」の業務、収蔵資料のデジタル化に着目した質的調査の研究成果を発表しました。

従来の研究では、博物館のソーシャルメディア投稿やオンラインコンテンツといった「表舞台」のデジタル活動の変化が注目されてきました。しかし、これらのデジタル発信を可能にしているのは、収蔵資料のデジタル化という基盤作業です。本研究では、リトアニアの各地に位置する複数の国立博物館の職員 16 名への半構造化インタビューを通じて、このデジタル変革の「出発点」となる業務がパンデミック期にどのような変化を遂げたかを初めて体系的に明らかにしました。

【解説】

パンデミック期の博物館に関する研究は、これまでウェブサイトやソーシャルメディアなどといった来館者向けの情報発信に焦点が当てられてきました。これは、博物館が来館者を受け入れられない中で、オンラインの活動が社会との繋がりに大いに貢献したからです。しかし、この間における博物館のデジタル変革の基盤となる収蔵資料のデジタル化のプロセスについては、十分な議論がなされていませんでした。

本研究は、博物館の来館者からは直接見えない場所で日々行われているデジタル化業務に着目することによって、博物館を閉館せざるを得ない、また、いつ再開館できるか分からないという特殊な状況下で、これらのプロセスがどのように変化し、適応したのかを、当事者に対するインタビュー調査を基に明らかにしました。

研究では、2023 年 9 月、リトアニアの主要都市に位置する国立博物館 6 館（リトアニア国立博物館、マイローニス・リトアニア文学博物館、リトアニア教育歴史博物館、シャウレイ「アウシュロス」博物館、「アルカ」ジェマイティア博物館、リトアニア海洋博物館）においてデジタル化に従事していた 16 名の博物館の専門職員を対象に、半構造化インタビュー調査を実施しました。

質的内容分析の結果、博物館のデジタル化業務は「通常業務」と「パンデミック／ロックダウン下での業務」の2つの主要カテゴリーに分類されました。特に、パンデミック期間中の変化として、リモートワークの急速な導入、LIMIS（リトアニア統合博物館情報システム）の活用拡大、博物館専門職員のコンピューター技術に対する意識変化が明らかになりました。特筆すべき点としては、デジタル化プロセス自体は変化しなかったものの、その重要性和意義が大幅に向上したことが確認されました。

【研究の意義】

本研究は、パンデミックとロックダウンという危機的状況における博物館のデジタル変革について、現場の視点から具体的な知見をもたらすものです。世界中の博物館の8割以上が休館を余儀なくされたという、博物館史における重要な出来事を記録し、文化機関が社会情勢にどのように適応するかについての理解を深めることに貢献しています。さらに本研究の分析結果は、博物館の将来起こりうる危機への対応として、重要な知見となります。特に、デジタル化プロセスが、専門職員とパソコンのみで完結する（他の職員等との接触なしに実行できる）作業であるため、パンデミック下でも継続可能であったことは、特筆すべきです。以上に述べた研究成果は、博物館のレジリエンス（回復力）向上に向けた戦略策定に重要な示唆を与えています。

【発表雑誌】

Curator: The Museum Journal (Early View, published on June 5, 2025)

論文 DOI: 10.1111/cura.12679

論文 URL: <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/cura.12679>

（本論文はオープンアクセスで全文公開されています。）

【論文名】

The Impact of the COVID-19 Pandemic on Digitization in Museums: The Lithuanian Case

【著者】

木村 文 帯広畜産大学 人間科学研究部門 准教授

【特記事項】

本研究は、日本学術振興会科研費基盤研究（若手）23K12317の助成を受けて実施されました。

【連絡先】

帯広畜産大学 人間科学研究部門 准教授

木村 文

TEL: 0155-49-5603

E-mail: akimura@obihiro.ac.jp